The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	亀類が人間に変身する話の日中比較 : 中国における交接、報恩の話と日本の浦嶋子の話を中心に
Author(s)	王, 貝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 47-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

亀類が人間に変身する話の日中比較
――中国における交接、報恩の話と日本の浦嶋子の話を中心に――

王　貝

１　はじめに

亀類が人間に変身する話は、中国では晋代、日本では遅くとも奈良時代に出現し、日中両国においては早い時期に出現した変身に関する話と言える。また、亀類が人間に変身する意味[1]という観点からみれば、中国の場合は話が交接・報恩・加害・援助など多岐にわたり、それに対して、日本の場合はいずれの話も女性に変身した亀と婚姻関係を結んだ浦嶋子の話である。

本稿では、亀類が人間に変身する話について、以下 3 つの問題に注目して考察を行う予定である。①中国で多く書かれた亀類が人間に変身する話の特徴、②亀類が交接、または報恩のために人間に変身する話の特徴、③これらの特徴は日本の浦嶋子の話とは、どのような相違点があるのかを調べる。これらの問題を解決するために、本研究では、まず、中国における亀類が人間に変身する話の特徴をまとめる。次に、日本の浦嶋子の話を概観する。さらに、日本の浦嶋子の話では、交接と報恩の話しか存在しないため、浦嶋子の話と中国における類似する話（亀が交接か報恩するために人間変身する話）との比較を通してこれらの話の相違点を明らかにする。

２　中国における亀類が人間に変身する話

中国の場合は、類書の『太平御覧』と『太平廣記』[2]を主な資料として、『古今図書集成』[3]を補足資料として、「亀」・「龜」[4]・「鼈」・「黿」をそれぞれキーワードとして調査を行った。鼈と黿は、それぞれすっぽん、大型すっぽんである。しかし、鼈と黿は、形態が亀と似ており、変身の話の中では亀との使い分けがされていないため、本研究でもこの 2 つの動物を亀と合わせて亀類として取り扱う。本研究では、上記の抽出方法により、亀類が人間に変身する話を 12 話抽出できた。抽出した話は、唐以前に集中しており、宋代以降に書かれたものは 2 例しか存在しない。また、これらの話から、以下の３つの特徴が見られる。

２．１　変身後の性別――亀類が男女ともに変身できる

亀類が人間に変身する話が文献上最初に登場したのは、晋代に書かれた『志怪』[5]である。『志怪』は散逸した文献ではあるが、この話は、『太平廣記』巻 468 に引かれている。話の内容は以下のとおりである。

> 謝宗という人が船で吳皐橋を通った時に、同船の人が市場に行ったため、船の中で独りぼっちになってしまった。とある優しそうで美しい女性が船を訪れ、船の中で謝宗と出会った。この女性は謝宗と意気投合し、船に乗せてもらうよう頼み、許可をもらって船に乗った。その日から、同船の人が毎晩喋ったり、笑ったりする声が聞こえた。謝宗は、この女性と 1 年以上の付き合いがあった。謝宗と同じところに住んでいる人が覗き見ると、誰もいないため、その女性が化け物であることを知り、化け物を捕まえようとした。皆が一緒に布団でベッドを覆って、ずいぶん長い間待って、枕のような大きさの亀 1 匹が現れた。しばらくすると、

---

[1] 中村(1984)では「変身の意味」という言葉を用いて、動物と人間の間の変身に含まれる「変身の意義」(p.6) を指している。具体的には、「通婚」、「加害」、「利便」、「報恩」などがある。本研究では、この言葉を借用して、亀が人間に変身する目的を表す。なお、本研究における「変身の意味」は、「交接」、「報恩」、「加害」、「援助」に分けられる。

[2] 中国哲学書電子化計画データベース、2015 年 3 月 24 日付更新データを利用。http://ctext.org/zh/。

[3] 古今図書集成全文資料庫データベース、2003 年 10 月 6 日付更新データ（Version 1.0.1）を利用。http://210.60.55.29/book/。

[4] 「亀」の異体字である。

[5] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p.3861。現代日本語の要約は筆者による。李剣国（2011）pp.430-433 によると、『志怪』は後晋の孔約によって書かれた『志怪』を指し、成立年代は『搜神記』よりやや遅れる。

またこぶしのような大きさの亀 2 匹が現れた。謝宗は数日後にやっと（女性は亀であることを）悟った。そして謝宗は皆に、その女性は 1 年の間に男の子を 2 人産んだことを告げた。

この話は、美女に変身した亀が人間の男性と交接したが、人に捕まえられたことによって、亀の姿を現し、破局を迎えた話である。謝宗は女性に変身した亀と 1 年間同宿しただけでなく、亀との間で息子が 2 人できている。

また、亀が男性に変身する話も存在しており、例えば『太平廣記』巻 469 に引かれる南北朝に書かれた『南雍州記』「蕭騰」[6]の話が挙げられる。

蕭騰という人は、官職につくため、彼に仕える女房たち数人と一緒に襄陽に向かった。途中、1 人の男が蕭騰を訪ね、車に乗せてもらうことを頼んだ。蕭騰はこの男の服がおかしいと思い、断った。数里[7]行って、その男はまた来て、車に乗せてもらうことを再び頼んだ。このようなことが何回も繰り返されたため、蕭騰はますます怪しいと思うようになった。それだけではなく、蕭騰に仕える女房たち数人の様子もおかしくなり、歌ったり笑ったり泣いたりするようになった。蕭騰が襄陽についた後、その怪しい男も襄陽に到着し、何日も蕭騰の家に居続けた。この男は蕭騰の家で犬に乗ったり、詩を詠んだりして、自分が周瑜であると称した。蕭騰は祭祀をしてその男を追い払おうとしたが失敗した。そして門生 20 人を率いてその男を刀でたたき切ろうともしたが、男の行動が速いため失敗した。その後、趙曇義という道士が蕭騰の家に来て、壇を設置し、この男を追い払おうとした。すると、1 匹の亀が自ら壇の所に来て、死んだ。蕭騰に仕える女房たちももとの様子に戻った。

これは、男性に変身した亀が蕭騰に仕える女房たちを惑わし、精神を混乱させたという話である。

そのほか、変身後の性別が示されていないものもあるが、中国の亀が人間に変身する話において、亀が男女ともに変身できることは 1 つの特徴である。

２．２　変身の意味が多岐に渡る

動物が人間に変身する話の中では、動物が人間と何らかの形で交流するために、人間に変身することが一般的である。中国においては、亀類が人間に変身する意味として、加害・援助・交接・報恩などが挙げられる。

例えば、2.1 で挙げた男性に変身した亀が蕭騰の女房を惑わす話は、亀が人間に加害するために変身した話である。この話においては、亀が人を惑わす妖力を持っており、亀を追い払うには普通の人の祭祀や斬殺が効かず、最後に道士の力でようやくそれを退治できたという描写がある。このような描写から、加害するために男性に変身した亀は妖力が強く、厄介なものであることが読み取れる。

このほかにも、人間を援助するための変身の例として、『太平廣記』巻 470 に引かれる『廣異記』「謝二」[8]が挙げられる。この話は、謝二という人に変身した黿が不遇の書生に同情し、彼を助けたが、書生に裏切られ、怒って書生とその家族を殺した話である。

亀類が交接のために人間に変身する話として、2.1 で挙げた謝宗の話以外でも、『太平廣記』巻 469 に引かれる『續異記』「朱法公」[9]が挙げられる。話の内容は以下のとおりである。

朱法公という人が出かける時に、年十六・十七歳の美女と出会った。その夜美女は朱法公と一緒に寝て、夜明けになると「明日また来る」と言い、去った。このように、美女は何日も、夜は朱法公と一緒に寝て、夜明けになると去った。ある日、夜明けに美女が朱法公のところから帰ろうとしたときに、下裳が開いてしまった。朱法公は開いた下裳の中の亀のしっぽと亀の足を見て、やっとそれ（美女）は妖怪であることを悟った。そして彼は、彼女を

---

[6] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3866-3867。現代日本語の要約は筆者による。
[7] 長さの単位、1「里」は 500 メートル。
[8] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3870-3871。現代日本語の要約は筆者による。
[9] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3865。現代日本語の要約は筆者による。

捕まえようとした。その日の夕方に美女がまた来た。朱法公は火をともして彼女を探したが、姿は見えなかった[10]。

謝宗と朱法公の話から見ると、亀が交接のために人間に変身する話は、おおむね以下のような展開になる。亀が美女に変身し、積極的に人間と接する。人間は美女の正体を知らないままに美女と交際・交接する。人間と亀の間の交際は、一年あるいは数日にわたる。その後、人間は、何らかのきっかけで亀の正体に気づき、亀を捕まえようとする。正体が知られた亀は、人間に捕まえられるか、自ら姿を消すかで、最後は必ず人間と別れるようになっている。

亀が報恩のために人間に変身する話として、『太平廣記』巻 118 に引かれる『獨異志』「嚴泰」[11]が挙げられる。

嚴泰という人が五千のお金で漁師から亀 50 匹を買って、江に放した。その日の夕方に、嚴泰の家に黒い服を着ている人が 50 人来て、嚴泰の両親に五千のお金を返そうとした。嚴泰の両親は不思議に思ったが、そのお金を受け取った。その後、嚴泰が家に帰って来て、両親はこのことを彼に聞いた。そして、それは嚴泰に助けられた亀がお金を返しに来たことがわかった。このような逸話があるため、嚴泰の家を寺にした。里人は嚴法寺と称した。

この話は、人が亀を助けたため、亀が人間に変身して恩返しする話である。似たような話として、『太平廣記』巻 471 に引かれる『稽神錄』「宋氏」[12]が挙げられる。

宋氏は一千のお金で漁師から黿を 1 匹買って、江に放した。数年後、宋氏が龍沙で船を岸に着けた時、元という国司が宋氏を招いた。国司は自ら自分は数年前に宋氏が放した黿であり、今は九江長という官職についていると紹介した。そして、宋氏の子供が数日後に風雨の中で溺れ死ぬことを告げ、この災いを回避する方法を宋氏に教えた。数日後、黿の言ったとおりに、風と波の害で多くの人が死んだが、宋氏の子供は助かった。

宋氏の話の前半は、唐代に書かれた「嚴泰」の話と似ており、主人公が漁師から黿を買って放したが、後半では「嚴泰」の話にある「亀がお金を返した」とは異なり、黿は予言を残し、宋氏の子供の命を助けたと記述している。中国において、春秋時代から亀は麟・鳳・龍と並列し、「四霊」として認識され、神に近い存在として崇拝されていた[13]。このような亀に対する崇拝は亀の変身譚にも影響を与えた。上記の話では、宋氏に助けられた黿は天運を知り、予言の能力を持ち、災難を回避する方法まで知っているというような描写から、黿は神的な能力を持っていることがわかる。そして、黿は「九江長」と自称しており、「九江長」は「九江」という河の神を指しているため、この黿は河の神だと考えられる。つまり、中国においては、古来から、亀が神的なイメージを持っており、このようなイメージは亀が人間に変身する話にも反映されている。

「嚴泰」と「宋氏」の話から見ると、亀類が報恩のために人間に変身する話の展開はおおむね以下のようである。亀類は亀類の姿で人間に助けられ、その後、恩人にお金を返す、あるいは予言を伝達して恩人を助けるために人間に変身する。そして、報恩の行為は一回に限り、人間との交流も言葉を交わす程度にとどまる。

２．３　人間との交流を目的としない変身

人間の形に変身した亀類が、人間との交流がまったくない話も存在する。

---

[10] 原文は「向夕復來。即然火照覓。尋失所在。」と記しており、「夕方に美女がまた来た。（朱法公は）すぐに火をともしたが、姿は見えなかった。どこを探してもいなかった」という意味である。おそらく美女がやってくる足音がしたので、朱法公は薄暗い中で火をともして探したと推測される。

[11] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第二冊、p. 826。現代日本語の要約は筆者による。

[12] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3878-3879。現代日本語の要約は筆者による。

[13] 薛甜甜 张文静（2012）、p. 32 は「在《礼记》中就曾有过这样的记载：“何谓四灵，麟、凤、龟、龙，谓之四灵。”从很早开始，麟、凤、龟、龙就是中华民族的灵物了」と指摘している。

『太平廣記』巻 469 に引かれる『九江記』「王奐」[14]は、人間は傍観者の立場で女性に変身した亀らの対話を聞いた話である。

王奐が建業から渚宮に向かう途中、江州で船を岸に着けた。夜が深くなると、川の中州から女性十数人の声が聞こえた。王奐がひそかに覗き見ると、葦の中に緑や青の服の十数人の女性が別れ話を語っていた。北風が吹き始め、潮が来る時に、彼女たちは亀になって川に入って去った。

『西湖遊覧志餘』巻 26[15]の話は「王奐」の話と似ており、人間が傍観者の立場で鼈らの対話を聞いた話である。

1 人の船頭が西湖の断橋の下に船を停泊させた。その夜、身長が 1 尺にも満たない 3 人が話しているのを見た。3 人のうち、1 人は「張公が来ればどうする」と言い、もう 1 人は「賈平章は仁者ではない。絶対に許さない」と言い、残りの 1 人は「私はおしまいだ。あなたたちは賈家の衰退を見ることができる」と言い、3 人ともに水に入った。その次の日に、張公という漁師が橋の下で一匹の鼈を捕まえた。その後、賈家の勢いは衰えた。

この話は最後に、「蓋物能知數而莫之逃也（生物は天運を知ることができるが、天運から逃げることができないのであろう）」という一言で締めくくられており、亀類は予言の能力を持っていることを説明している。亀類の予言の能力に言及する点は、2.1 で挙げた宋氏の話と類似している。

上記の 2 話では、人間に変身した鼈は人の言葉を話せるが、人間との交流がない。通常、動物は人間と何らかの形で交流するために人間の形に変身することがほとんどであるが、中国の亀が人間に変身する話においては、その変身は必ずしも人間と交流するための変身とは限らない。この点も中国の亀が人間に変身する話の 1 つの特徴である。

以上のように、中国において亀が人間に変身する話に、様々なパターンがある。これらのパターンの中では、もっとも早く登場したのは交接のパターンである。南北朝になると、交接のパターン以外、新たに加害のパターンも登場した。恩返しのパターンの登場はもっとも遅く、唐代になって、はじめて登場した。ところが、これらの話に、複合型のパターンは存在しない。例えば、恩返しするために人間と交接するような話が存在しない。中国における亀が人間に変身する話では、共通しているパターンやモチーフがあるが、個々の話の流れから見れば、前の時代の話とは直接に関係することがなく、比較的に独立しているように思われる。

３　日本における亀類が人間に変身する話

日本側の場合は、大系本文古典文学データベース[16]を利用して、変身の話を抽出した。抽出する際に、中国の場合と同じように、「亀」・「龜」・「**鼈**」・「黿」をキーワードとして調査した。その結果、亀が人間に変身する話を 3 話抽出できた。抽出した 3 話は、いずれも浦嶋子に関連するもので、女性に変身した亀が人間の男性と通婚する話である。

３．１　女性にしか変身しない亀型の神

亀が人間に変身する話が記載されているもっとも古い文献は、奈良時代の『日本書記』である。『日本書記』巻 14「大泊瀬幼武天皇 雄略天皇」には、「水江浦嶋子」[17]の話が記載されている。話の内容は以下のとおりである。

---

[14] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p.3865。現代日本語の要約は筆者による。

[15] 田汝成撰『西湖遊覧志餘』、欽定四庫全書、影印古籍、コマ番号 108－109、参照 URL: http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=73669&page=108。現代日本語の要約は筆者による。

[16] http://base3.nijl.ac.jp/。2014 年 6 月 27 日付更新データを利用。

[17] 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書記』②、新編日本古典文学全集 3、小学館、2006 年、p.206。現代日本語の要約は筆者による。

丹波国余社郡管川の人水江浦嶋子が船に乗って釣りをしていた。すると、大きな亀が釣り上げられた。その亀は女になった。浦嶋子は彼女を妻にして、一緒に海に入った。2 人は蓬莱山に至り、仙人たちをめぐり見た。

この話において、女性に変身した亀は浦嶋子を仙境となる蓬莱山まで案内した。先行研究である中村（1984)、村山(2004)、三舟(2009)、林（2010）[18]は、この話の中における「蓬莱山」や「歴覩仙衆（仙人たちをめぐり見た)」の記述に注目し、上記の話は中国の神仙思想の影響を受けたと指摘している。中国の神仙思想は、不老不死の実現を理想とする中国古代の民間思想である。この神仙思想には、蓬莱山、方丈山、瀛洲山という 3 つの神山に仙人が住んでいるという俗信が含まれている。また、神仙思想では、亀は長寿の動物であり、瑞祥の象徴として捉えられている。上記の話における亀のイメージについて、三舟(2009)は、「亀から変身した女性も「仙女」と考えられ、神仙思想の影響を受けていることが明らかである」[19]と述べており、話の中の亀が神仙そのものであると指摘している。このように、日本において亀を神仙と捉えており、これは、2.2 で述べた中国古来の亀の神的なイメージの影響を受けた結果だと考えられる。

『風土記』逸文「丹後の国」に記載された「筒川の嶼子」[20]は水江浦嶼子という男が亀を釣り上げ、女性に変身した亀を妻にした話である。前半の部分は上記の話と似ているが、女性に変身した亀と男性の間の対話や後半に男性が故郷に帰る部分には詳しい描写があり、文学的叙述に富んだ作品だと感じさせられる。話の内容は以下のとおりである。

与謝郡の日置里の筒川村に、水江浦嶼子という美男がいる。嶼子はある日一人で小舟に乗って海で釣りをした。3 日 3 晩釣りをしたが、一魚も得ないで、五色の亀を釣り上げた。不思議と思い、亀を船の中に置いた。そして嶼子が船の中で寝ている間に、亀が美女になり、自分は天上の仙の家の人であり、風雲に乗りやってきたと嶼子に言った。嶼子は彼女が神女であることを知り、疑念は氷解した。美女は嶼子に蓬山に行くことを誘って、嶼子の目をつぶらせた。すると、2 人は海中の大きな島に着いた。その地は玉で敷き詰められたようである。その様子は見たこともなければ、聞いたこともない。2 人は手を取り合って、一軒の立派な家の門にたどり着いた。美女は先に門に入り、嶼子は門の前で美女を待った。待っている間に、その美女の名前は亀比売であることを知った。盛大な宴会の後、2 人は夫婦になった。嶼子は仙界で 3 年を過ごし、突然望郷の念に駆られた。彼はしばらく故郷に帰り、両親の顔を見たいと亀比売に告げた。亀比売は悲しんで、涙を拭いた。亀比売とその両親、親族は悲しみをこらえ嶼子を見送った。亀比売は玉匣を嶼子に手渡し、「私のことを忘れないで。また再会しようと思うのであれば、この匣を固く握り締め決して開けないでください」と言い渡した。そして、二人は別々の船に乗った。亀比売は嶼子の目をつぶらせた。忽ち嶼子は故郷に着いた。嶼子は里の人に、「水江浦嶼子の家族は今どこにいる」と聞いた。村人は、もう 300 年前のことであるが、昔、水江浦嶼子という人が海に出て、その後再び帰ってくることはなかったと彼に告げた。嶼子は両親と会うことができなかった。嶼子は玉匣を撫でながら神女のことを思い、前の約束を忘れて玉匣を開けてしまった。たちまちかぐわしい香の匂いが風雲と共に翻って、天上に昇って行った。神女との約束に反した嶼子は、彼女と二度と会えないことを悟った。そして、涙に咽んで、ただ歩き回るしかなかった。

この話においては、亀から変身した女性は神女であることが明記されている。

室町時代になると、「海神の娘」は亀と結びつけられるようになり、報恩のモチーフも加えられて、室町物語草紙『浦島の太郎』[21]が作り出された。室町物語草紙『浦島の太郎』において、浦島の太郎と亀との出会いは前掲の『日本書記』・『風土記』と同様である。つまり、話は浦島の太郎

[18] 中村（1984)、p. 31。村山(2004)、p. 128。三舟(2009)、p. 20。林（2010)、p. 4。
[19] 三舟(2009)、p. 21。
[20] 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集 5、小学館、2006 年、pp. 479-483。現代日本語の要約は筆者による。
[21] 大島建彦校注・訳『浦島の太郎』: 大島建彦　渡浩一校注・訳『室町物語草子集』、新編日本古典文学全集 63、小学館、2002 年、pp. 254-266。現代日本語の要約は筆者による。

が海で大きな亀を釣り上げたことから始まる。しかし、『日本書記』・『風土記』においては、釣り上げられた亀はただちに女性に変身したが、『浦島の太郎』においては、その亀は浦島の太郎によって放された。その後の話は以下のとおりである。

> 亀を釣り上げた浦島の太郎は、「鶴は千年、亀は万年」ということばから、亀をそのまま海に放した。その次の日、浦島は海上で1人の女性と出会った。女性は浦島の船に乗り、浦島を竜宮まで連れて行った。そして、自分は浦島に放された亀であり、恩返しとして浦島と夫婦になりたいと言った。そして浦島は彼女と夫婦になり、3年を過ごした。浦島は、家に帰りたくなり、彼女に請うた。彼女は手箱を浦島に手渡し、絶対に開けてはいけないと言って、浦島を見送った。浦島は故郷に帰り、ある70歳の翁に浦島のことを尋ねた。その翁は、「それはもう、700年前のことだ」と答えた。浦島は悲しくなり、手箱の中に何かがあると思いながら、ある松の下で箱を開けた。すると、浦島は百歳の翁となり、非常に悔しかった。そののちに、浦島は鶴に生まれ変わり、亀と遊び戯れた。

この話において、女性に変身した亀が住んでいるところは竜宮であることから、亀は龍女、もしくは海神の娘であることが推測できる。つまり、亀型の海神の娘が女性に変身し、浦島と夫婦になったのである。

『浦島の太郎』における海神の娘にせよ、『日本書記』・『風土記』における亀型の仙、神女にせよ、日本において、亀が人間の姿に変身する場合は、いずれも女性に変身することがわかる。つまり、日本においては、亀は女性にしか変身しない。これは、日本における亀が人間に変身する話の1つの特徴である。また、人間の姿に変身できる亀は、いずれも仙・神に関連しており、神に近い存在であると言える。これは、中国の神仙思想および亀の神的なイメージが、日本におけるこれらの話に大きな影響を与えた結果だと考えられる。

３．２　変身の意味――交接、報恩

日本の浦嶋子の話では、交接と報恩の話しか存在しない。『日本書記』・『風土記』の2話は亀が釣り上げられた後、船の中で女性に変身して男性と夫婦の契りを結んだ話である。亀が人間と婚姻関係を結ぶために変身したため、変身の意味から見ると、この2話は交接するための変身と言えよう。

『日本書記』、『風土記』の2話とは異なり、『浦島の太郎』においては、亀は浦島に放されたため、恩返しとして浦島と夫婦になった。「報恩＝婚姻関係を結ぶ」という構造になっているため、報恩と交接が複合した話であると思われる。

４　亀が人間に変身する話の特徴の日中比較

日本と比べ、中国における亀類が人間に変身する話は、内容が多種多様である。これは、日本と中国における亀類が人間に変身する話の数、変身後の性別、および変身の意味から理解できる。以下では、変身の意味から見られる中国と日本における亀類が人間に変身する話の異同について論じる。

変身の意味という観点から見れば、日中両国に重なりがあり、交接と報恩のための変身の話においては、亀に対するイメージと話の構造にいくつかの相違点がある。

まず、浦嶋子に関する3つの話を、中国の亀が交接のために人間に変身する話と比べると、以下の2つの相違点がある。

①前掲の中国の謝宗の話と朱法公の話において、男性は女性が亀であることを知らずに交際しはじめ、何らかのきっかけで女性が亀であることに気づいて別れた。つまり、亀は、自分の正体を隠し、男性をだまして交際・交接したのである。それに対し、日本の3つの話においては、いずれも男性は女性が亀であることを知ったうえで夫婦の契りを結んで共に生活した。

②「謝宗」の話において、美女に変身した亀に対して、「知是邪魅（妖怪であることを知った）」とし、「朱法公」の話も、「方悟是魅（やっとそれは妖怪であることを悟った）」と述べている。つまり、亀を妖怪の一種としている。それに対し、日本の場合は、3.1で論じたように、『日本書記』における女性に変身した亀は女仙であり、『風土記』における亀は神女である。このような違いか

ら、交接のために人間に変身した亀に対するイメージは、日中においては、大いに異なることがわかる。

このような相違が生じた理由は以下のようである。中国においては、変身の物語は古くから「怪異」と見做され、「志怪」と呼ばれる怪異の記録に属し[22]、書かれた当時に流行した志怪文学のモチーフに大きく影響されていた。例えば、上記の謝宗の話と朱法公の話は、魏晋南北朝時代に流行していた人間と異類が結ばれるモチーフに影響されたと考えられる。

中国では、魏晋南北朝時代に、人間に変身した動物が人間と交際・交接する話は数多く書かれた。富永（1978）は、魏晋南北朝の異類と人間が結ばれる 28 の説話に対して考察を行い、これらの説話に共通のパターンをまとめた。富永（1978）は、「異類は相手が男の場合には女に、女の場合には男に化けて登場し、大体一夜を共にする。そして必ず、破局を迎えることになっている。そこには、異類婚姻譚[23]の＜異類→女（男）→結ばれる→破局＞という単純化されたパターンを見出すことができる」[24]と述べている。また、富永によって挙げられた 28 の説話は、いずれも人間は相手が異類であることを知らないままに交際・交接する話であり、話の中で変身した動物は妖怪と見做されている。前掲の謝宗の話と朱法公の話はそれぞれ晋代、南北朝時代に書かれた話であり、この時代に流行していた上記のような異類婚姻譚のモチーフに影響された可能性が高い。

以上をまとめると、中国においても亀類は神的なイメージを持っているが、交接のために人間に変身した亀類の変身の話は文学作品として、当時流行していた異類婚姻譚のモチーフに影響されたため、亀類は異類である「妖怪」として捉えられたことが推測できる。そして、人間と交際・交接するために変身した亀類は他の動物と同じように、人間を騙して交際・交接するようになった。これらの話の中の亀類も妖怪や、遠ざけられるべきものと見做されていた。

一方、日本においては、浦嶋子の話の根幹をなす『日本書記』「水江浦嶋子」が書かれた奈良時代に、動物と人間が結ばれる話が存在するが、中国のような人間を騙して交際・交接する動物の妖怪の話は見当たらない。奈良時代の動物と人間が結ばれる話のほとんどは動物型の神と人間が結ばれる、いわゆる「神婚譚」である。例えば、蛇型の神である「大物主」、「肥長比売」の話が挙げられる。そのため、亀と人間が結ばれる話においても亀は神的なイメージを持っていた。「水江浦嶋子」の話が書かれた後、この話に基づいて脚色し、潤色した『風土記』に記載された話および『浦島の太郎』が作られたが、神仙思想の要素および亀の神的なイメージが継承されてきた。

次に、亀は報恩のために女性に変身した『浦島の太郎』の話と中国の亀の恩返しの話については、以下の相違点が挙げられる。

2.2 で述べたように、中国の嚴泰の話と宋氏の話において、報恩の行為は一回に限り、人間との交流も言葉を交わす程度にとどまる。それに対し、『浦島の太郎』においては、亀は報恩のために浦島と婚姻関係を結び、3 年間共に生活していた。『浦島の太郎』の成立過程から見ると、この話は『日本書記』、『風土記』の 2 話に動物の恩返しのモチーフが加えられて、作り出された複合型の話だと考えられる。このように、浦嶋子の話は、『浦島の太郎』が書かれた室町時代になってから、動物の放生と報恩の要素が加えられた。これについて、先行研究ではこのような変貌が室町時代の仏教の隆盛によるものというように解釈している[25]。具体的に言えば、室町時代に、社会に定着した仏教が仏教思想を宣伝するために文学作品の創作を積極的に行い、それに伴い、浦嶋子の話のような民間の伝説にも、放生と報恩という仏教的な要素が盛り込まれた。

---

[22] 「志怪」という語の初出は『荘子』であり、怪異を記録するという意味で使われた。

[23] 富永（1978）によって挙げられた 28 の話では、婚姻関係を結んでいない異類が人間と交際・交接の話も含まれている。

[24] 富永（1978）、p. 6。

[25] 例えば、三舟(2009)、p. 102-103 では、「『御伽草子』などの中世浦島太郎の物語で画期的な点は、動物報恩譚という、昔話によくある恩返しのストーリーが強調されている点にある。亀の放生とその報恩によって、竜宮城に向かうのである。放生と報恩が仏教的な要素ならば、「他生の縁」「二世の縁」「来世」「会者定離」などの仏教用語も多数登場する。(中略) これはこの時代に仏教が社会に定着し、貴族・武士層ばかりでなく庶民層まで広がり、庶民仏教の時代となったこととも関係する。仏教の庶民化によって僧侶の民衆布教が盛んとなり、必然的に仏教をわかりやすく解説するために説教が行われ、寺院縁起や霊験譚が創作され、また仏教儀礼は民間芸能と結合してやがて能・狂言を生みだしていく。民間の伝道僧は、庶民のために仏の教えを説く唱導を盛んに行う」と述べている。

おわりに

亀類が人間に変身する話は、日本と比べ、中国における話が多様である。中国の亀類が人間に変身する話においては、亀類には神的なイメージが反映される一方、魏晋南北朝時代に流行していた異類婚姻譚のモチーフの影響を受けて人を化かす妖怪というマイナスのイメージも存在する。それに対し、日本における亀が人間に変身する話は、中国の神仙思想と亀の神的なイメージに影響され、亀の神的なイメージが継承されてきた。

参考文献：

井原七緒子「浦島伝説の起源について」、『学海』9、上田女子短期大学、1993 年、pp. 41-50

植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集 5、小学館、2006 年 8 月 20 日第一版第五刷発行

大島建彦　渡浩一校注・訳『室町物語草子集』、新編日本古典文学全集 63、小学館、2002 年 9 月 20 日第一版第一刷発行

小島憲之　直木孝次郎　西宮一民　蔵中進　毛利正守校注・訳『日本書記』①②＜全三冊＞、新編日本古典文学全集 2・3、小学館、2006 年 6 月 20 日第一版第四刷発行

富永一登「「人虎伝」の系譜―六朝化虎譚から唐伝奇小説へ―」、『中国中世文学研究』13、中国中世文学会、1978 年、pp. 1-17

中村禎里『日本人の動物観―変身譚の歴史』、海鳴社、1984 年

林晃平「浦島伝説から見る仏教文化」、『駒澤大學佛教文學研究』13、2010 年、pp. 3-26

三舟隆之『浦島太郎の日本史』、吉川弘文館、2009 年

村山芳昭「「浦島説話」と易(陰陽)・五行、讖緯思想」、『東アジアの古代文化』119、大和書房、2004 年、pp. 128-147

李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年

李剣国『唐前志怪小说史』、人民文学出版社、2011 年

薛甜甜 张文静「龟形象由古到今的变化的研究」、『神州』、2012 年 1 月（下旬刊）、p. 32